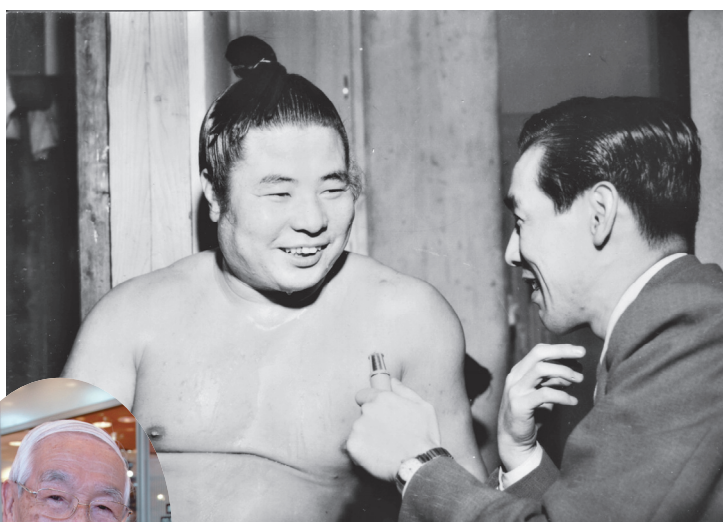


# みんがで語り継ぐ ろう民放送史

題字 中川 順

相撲を伝えて70年、

名横綱との交歓と思い出を語る



原 和男 (QR・NTV・FBS)  
東京相撲記者倶楽部会友



私が生まれた大正15年、横須賀市は軍港で、海軍の相撲が盛んだった。

連合艦隊が入港する度に歓迎こども相撲大会が催され、私は毎回優勝して横綱にもなった。



こども相撲で優勝  
(小学4年)

## ◇アナウンサー誕生

昭和22年のことだ。早大の同級生から、「一人で受験するのは心細いからNHKのアナウンサー試験を一緒に受けてくれ」と頼まれて気軽に付き合った。

ところが友人は落ちて、冷やかしのもりだった私が合格してしまった。

NHK高知で勤務していた昭和27年2月、一通の電報が届いた。「スモウハウソウ ヤリタケレバ スグコイ ブンカハウソウ」。

元NHK職員で文化放送の創立業務をしていた友人からの電報だった。

生後3か月の長女の傍らで夫婦

で話し合った。「志村アナウンサーたちが伝える近代相撲の面白さ、技能派で小兵の栃錦の魅力を実況出来たらなあ」という私の考えに妻も同感だった。

民間放送が経営的に成り立つのか、給与はいくらなのかなども確かめないままNHKを辞め、開局前の文化放送に入った。



相撲中継の筆者  
(文化放送)

栃錦は正攻法の技能派の名人だった。付き合ってみると思いやりのある心の暖かい人柄であることが分かった。

昭和30年夏、栃錦は14日目に5回目の優勝を決め、千秋楽に新大関、大内山と対戦した。

私は幕内力士土俵入りのあと、大内山に、「突っ張りまくれば、お客さんが喜ぶよ」と声をかけた。

気の弱い大内山は終始突きに突いて稀に見る大相撲となり、粘り抜いた栃錦の捨て身の首投げで大歓声の内に勝負がついた。

その夜の祝宴で、大内山が優勝したような気分で酒を酌み交わした。

後日、栃錦に話すと「原さんがけしかけたのかあ、大内山の気迫は本当にすごかった。でも相撲史に残る大一番だったというなら『ワシも嬉しい』と笑みを浮かべながら応じてくれた。



優勝した栃錦と  
出羽海理事長(常の花)

### ◇32年、日本テレビへ

この栃錦が春日野理事長になったばかりの昭和49年に想像もつかないような大問題が起こった。

日本テレビの後藤達彦編成局長から、NHKと日本テレビを除いた民放3系列が地方の3場所を独占中継する計画を進め、相撲協会の二子山親方(元横綱・初代若乃花)もその窓口として前向きに検討しているという情報を聞かされてビックリ仰天した。

この情報の真偽を確かめるため九州場所の初日、協会理事長室へ

向かった。すると春日野さんが「プロ野球の中継料はどの位か、民放の午後の時間帯の収入はどの位になるのか」等々、矢継ぎ早に質問を浴びせてきた。

春日野さんの傍らで横になつていた二子山さんの耳に入っていたと思う。慌てた私は後藤君に連絡を取り、「日本テレビも即刻、春日野理事長に申し入れるべきだ」と進言した。「月曜日は役員会があつて重役は誰も出張できないので江守運動部長を連れて行つてほしい」とのこと。

3日目の朝、浜の浜にある春日野部屋に江守部長と共に行った。朝稽古に立ち会つた春日野さんとチャンコを食べていると「原さん、何か用事があつて来たんでしょ」と柔らかい声で尋ねられた。

渡りに舟と、民放の中で昭和28年8月に最も早くテレビ開局した日本テレビはすぐに秋場所の中継を始め、その後民放テレビが次々と開局した。

栃若の全盛時代には、NHKを含めたテレビ5局が皆大相撲中継を競い合つた。その末、テレビ朝日が中継から大相撲ダイジェストに変わり、フジが撤退、東京放送

も中止した。日本テレビだけが大大相撲中継を昭和41年の初場所まで14年間続けたことを詳しく説明した。春日野さんは「優勝力士を囲んでの番組に何回も出さしてもらつた。ゴルフの帰り道が渋滞して放送に遅れそうになった」等々いろいろな思い出を懐かしそうな笑顔で応じてくれた。



横綱栃錦を迎えて

そして「一番早く相撲放送をやめたのは日本テレビだと聞かされていたがあれはウソだったのか?」ワシが理事長になつたばかりの春場所の時、大阪の民放の斎藤守慶という取締役が来て「独占放送ご承認をよろしく」と言つたのだという。

こうした経緯がありながら「原さんはアナウンサーというより相撲放送の責任者だったんだから、日本テレビから正式に申し入れがあつたと受け止めるよ」と言ってくれた。

その九州場所の9日目の理事会で、春日野理事長の、「日本テレビからも正式な申し込みがあつた」との報告後に議事に入った。

年6場所のうち4場所を民放4系列の独占中継を受け入れたとなるとNHKは2場所しか中継出来ない。

戦前はラジオ、戦後はテレビを中心に相撲中継が続けているNHKを裏切ると同じだ。国民が納得するだろうかという反対意見が大半だったという。



横綱若乃花をスタジオへ

春日野さんから「全国津々浦々ちやんと見られるのはNHKしかない」という発言もあって、今まで通りのNHKが6場所中継を続ける結論になった。これで日本テレビ以外の民放3系列の3場所独占中継という事態は雲散霧消した。もともとこれでNHKとの契約料は大幅のアップになったとか。春日野理事長の公正な判断がなければNHKや日本テレビの面目は丸つぶれになっていたであろう。



ゴルフ場で栃錦と

◇教会再建に力士たちの協力  
私事だが、キリスト教徒の私は中野区野方町にある教会に連なっていた。この会堂は戦後すぐに古い建物を移築したもので、年とともに雨漏りがしたり、床が抜けたりするようになったので昭和36年会堂を建て直すことになった。ところが当時は小さい教会だった

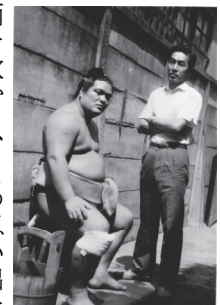
ため、教会員の献金だけでは建築資金が足りないもので、それぞれが外部に援助を求めることになった。

私がまず献金を頼んだ相手は、佐渡嶽部屋(後に横綱)の高校卒の入門時からつきあっており、師匠は、日本テレビの相撲解説者の佐渡ヶ嶽親方(元小結琴錦)。



佐渡ヶ嶽親方と  
原(左) 共同通信京須記者

琴桜が三段目優勝しても、小屋の若手であるために招待して祝ったくれる人がまだいないと親方がぼやくので、我が家に呼んで妻手作りのギョーザ等を琴桜に食べてもらった。  
「奥さんの心のこもったギョーザはうまかった。涙が出るほどうれしかった」と喜んでくれた。それ



自宅で琴桜と

て酒を飲むと、この思い出を口癖のように繰り返して、亡くなるまで番付表を送り続けてきた。

このとき生真面目な琴桜が2千円(今の時価で2万円余)を快く捧げてくれた。傍らでこのことを耳にした技能派の海乃山(小野川部屋)が2千円を寄付すると自分から言い出した。

双差しの名手「リヤンコの信夫」といわれた信夫山は海乃山の兄弟子であり私の親友。新番付で小結にしか上がれなかった信夫山を慰めようと会いに行つたことがある。「小屋屋の者に冷たい番付だ」と嘆くので「自棄になるなよ、今度勝ち越せば関係になれるじゃないか」と私は励ました。

信夫山は「目標を原さんから貰った」と気分直しに、おいしいマカロニグラタンの店を知っているから一緒に行こうよとの誘いに乗って新橋へ行った。  
海乃山も「ワシにも同じような

番付問題があった時、原さんが励ましてくれた。だから信夫山の感謝と合わせてお礼をしたい」  
私の胸に温かい思いがイッパイに広がった。

3人目の献金者は、大関直前の豊山。多忙にも拘らず放送に出演してくれた。

番組が終わった楽屋で会堂建築のことを話すと、豊山は手渡したばかりの5千円入りの謝金袋をそのまま差し出した。

「そんなに沢山ではなく、千円でも二千円でも十分ですよ」と私が言うと「わたしは相撲人としての給料を相撲協会から貰っている(月給制度は、豊山が敬愛する師匠の元双葉山が作った)この謝金は飲んでしまいか何かで、訳も分からない内に無くなってしまうと思う。大相撲の魅力を放送してもらった感謝と合わせて、このお金を会堂建設に役立たせてほしい。是非使ってほしい」。

知性と理性が豊かで気配りの行届いた対応だった。相撲道を求め続けた大力士双葉山と同様に理事長になる芽はあったのだ。

4人目は横綱柏戸。私と同年の星甲の千回出場記念の祝宴の司会



する合間を縫って柏戸にも話をした。すると浴衣姿の懐から大きなガマグチを出し、テーブルの上に全部空けた。硬貨も混じり約5千円あった。「原さん、今持っている金はこれだけだけど、これでよかったら全部献金するよ」。



柏戸に単独インタビュー

山形県出身の江戸っ子ともいわれた柏戸とは金ボタンの高校生の時から知り合った仲だ。素晴らしい出足と同じような竹を割ったような明るい柏戸。タニマチの接待酒よりも、身銭を切って付け人たちをねぎらって飲むのが好きだった柏戸が懐かしい。

5人目は大鵬。稽古上がりの大鵬にも話した。なぜか大鵬は「柏戸さんはいくら献金した?」と聞く。私は心の中で柏戸に合わせるのかと思うながら、「5千円」と答えた。大鵬は札入れから一万円を取り出し「これだけ献金するよ」今の時価で十万円以上の大金だ。

いくら何でもそんなにはと辞退すると、大鵬は「ワシは相撲界を背負って立つ責任をどうしたら果たせるかと何時も考えている。他の人と同じ額を献金すればいいという訳にはいかない。だから、是非献金させてほしい」と頼むように言う。思い上がっているのではなく自らの立場を常に自覚している大鵬ならではの言葉。



ちゃんこを囲む大鵬

大鵬はケチだと陰口を言う人もいたが、ケチどころか無駄な金使いを絶対にしない人柄に感嘆するばかりだった。

五人の関取の協力もあって会堂は完成した。当時の牧師は「お相撲さんにも献金してもらった会堂

は全国でも珍しい」と感謝したが、今も毎週その会堂で大勢での礼拝が捧げられている。



大鵬幸喜

#### ◇大横綱大鵬の遺志は今も

この献金がきっかけになったのか、大鵬はそれから福祉施設への大型テレビの献品を始めた。

更に発展して、引退が近づいた昭和44年から日赤への血液運搬車・大鵬号(一台時価2百万近い)の献品を始めた。生まれつきの高血圧に悩まされた大鵬ならではの社会奉仕である。

「巨人・大鵬・卵焼き」と愛された大鵬は40年近くも社会への返礼を続け、大鵬号70台、他にも日赤用3台と累計73台、時価に換算して1億4千万円もの奉仕活動をつ

づけた。

大鵬は終戦間際、樺太から引き揚げての貧困と、相撲の猛稽古の苦しさを耐え忍んだので、色紙には「忍」の字を書いていた。

「引かば押せ、押さば忍せ、オシテ勝つのが相撲の極意」の教えを守って攻守兼备の大横綱、そして慕われる人柄にもなった。

そして晩年は揮毫を請われると「福寿」と書くようになった。福は幸福であり福祉でもある。寿は長命、祝う。祈るでもあり、大鵬の願いでもある。お通夜の弔問に行くと大鵬は稽古場の片隅に安らかな寝顔のまま横たわっていた。全力で走り抜けた人生に感謝しているかのように72歳の生涯を終え、眠りに就いたのである。

白鵬は、大鵬の優勝32回の大記録を破った時「ワシの相撲のお父さんは大鵬関、その恩人の大鵬さんに並ぶことが出来た」と語っている。白鵬はやたらと張り手を使



ったり、ダメ押しをしたり、懸賞金の袋を右手で高く掲げてガッツポーズをしたりで勝ちを第一とし、相撲



東京相撲記者クラブ100周年  
千代大海、魁皇、白鵬、琴光喜、日馬富士、筆者

文化の美風を知らない土俵態度をとることが問題視されている。大鵬は戸田(後の羽黒岩)の突き押しに土俵際を右に左にと防戦したが、土俵を割った。だが攻める戸田の右足の方が勇み足のように蛇の目の砂を蹴っていることが分かった。この誤審のために大鵬の連勝は45に止まってしまった。大鵬も、若い頃は軍配の行方を気にすることがかなりあって、私は「静かに待っていた方がいい」と注意したことがある。ところがこの時には勝負審判を非難しなかった。

大鵬が本物の大横綱に成長したことを私は我が事のように喜んだものである。

双葉山は、「我いまだ木鶏たり得ず」と70連勝が成らなかった反省をした。大鵬は誤審をとがめるように、横綱らしくない相撲を取った自らを反省した。白鵬も大先輩の土俵態度を見習ってほしい。

今年2月6日に国技館内で恒例の力士の献血が行われ、71名の若い力士の血液が運搬車によって運ばれて行った。大鵬の遺志は今も生き続けている。

私は、文化放送、日本テレビで80歳過ぎまで三賞の選考委員を担当し、大相撲の名勝負や力士の生きざまに触れ続けて今に至っている。

反面教師のような力士もいたが、一人一人の努力や人間性に力士から教えられたことが数多く思い出される。

稀勢の里によって、相撲文化に裏打ちされた横綱相撲が展開されることを願っている。

## ◇エピソード

日本テレビの大相撲中継には当初から三菱グループがスポンサー

になっていた。番組の構成上コーナーシヤルに力士が登場するシーンがたびたび挿入された。

それは三役級の力士の工場見学であった。ある時、三菱重工の航空機名古屋工場の見学に柏戸、北葉山、大豪の三力士が付きあった。広い工場の中で注目されたのが、戦後最初の国産旅客機といわれるYS-11が試作段階に入るところでモックで作られた旅客機のタラップでの三力士の満足度はこの上ないものだった。

この後ヘリで名古屋へ移動ということになり、同乗することにな



三菱重工名古屋工場を見学する  
三力士(後方はYS-11のモック)

ったが、なぜか私だけが別のヘリにとのこと、最初のヘリは三人の力士とカメラマンで重量オーバーだという、力士との同乗はあきら

めざるを得なかった。

カメラの日本光学の見学では、豊山、豊国の両力士が精密機器の製作に深い興味を見せ、熱心に説明を聞き、カメラや顕微鏡の操作に夢中になるなど、ほほえましいシーンも見られた。



工場見学の大鵬、大天竜

横綱大鵬もこうした工場見学にも登場した。

北九州の三菱化成の工場では完成品を見たいというものの、化学製品を作る工場内は原料を運ぶパイプばかり、パイプばかりで見学の興味は半減したようだったが、終始にこやかに最後まで見学につきあってくれたことが深く印象に残っている。

【資料提供】筆者